

私にも
言わせて!
第155回

そして行政医師になる

子どもが好きで小児科医師になり、たくさんの子ともや家族に関わりつつ、大学の教官として教育に携わってきました。医師人生の後半を行政医師として働くことを決意し、令和6年4月に札幌市に入職しました。今回このような機会を頂きましたので、恥ずかしながら自己紹介として自身の経歴と展望を書かせていただきます。

小樽で水泳を始める

私は北海道の小樽市で生まれました。週末に家族と食べるあんかけ焼きそばや甘いパフェを楽しむにしている子どもでした。発熱により小児科受診を繰り返しましたが、小学校に入学して水泳を始めてからは、すっかり体は丈夫になりました。しかし、人間関係をすることが苦手で学校も嫌いだつたので、時々仮病を使つては学校を休んでいました。中学生になり同世代で一番水泳が速かった女子を好きになつてからは、その子に釣り合う人間になろうと水泳と勉強にエネ

ルギーを注ぎました。一番の目標だった水泳選手として結果は出せませんでしたが、人との関係を大切にする仕事に就きたいと考えて、教師か医師になることを目標にしました。幸い勉強の結果に恵まれて北海道大学医学部に入学することができました。

大学生活を満喫する

魅力的な先輩たちに誘われて北大体育会水泳部の一員として水泳を再開し、勉強そつちのけで仲間たちと過ごしました。練習を自分たちで科学的に考え、試合では仲間と一体になつて戦う環境のおかげで、自

した。この国内留学の経験は医師としての揺るぎない土台になっています。

教師になる夢がかなう

平成29年に周産母子センター助教として北大に戻りました。北海道中の最重症例が集まる周産母子センターでの臨床業務と、大学院生への指導、関連病院への出張で1か月の半分ほどは家に帰れない日々でした。一方で大学の教官になつたことで高校時代に医師と迷つた教師になる夢がかない、医学生や看護学生に新生児医療や虐待防止について講義を行う機会を得ました。講義を聞いた学生が、臨床実習で虐待を鑑別にあげて検査計画を立てた時は感無量でした。また、日本子ども虐待医学会の認定講師として、講演や新聞、テレビなどのメディアで話をさせていただく機会にも恵まれました。しかし、大学の助教として研究成果を残すことはできず、医局の方針と食い違うこともあり、令和6年3月に大学を離れることになりました。

そして行政医師になる

医局の垣根を越えて北海道の新生児医療を支えるか、発達障害医療



札幌市北区保健福祉部で保健担当部長
古瀬 優太

平成15年に北海道大学医学部を卒業し小児科学講座に入局。24年に博士号を取得し同年神奈川県立こども医療センターの新生児科に国内留学。29年から北海道大学病院周産母子センター助教としてNICU勤務および学生教育に従事。令和6年4月から札幌市に行政医師として入職。日本小児科学会専門医。日本周産期・新生児学会専門医(新生児)、日本子ども虐待医学会(講師・代議員)。

切ることができました。

親子を救う新生児医療の道へ

卒後2年目の勤務先は総合周産母子センターである北見赤十字病院でした。その年若手トップの先生とNICUのチーフが休職されたため、勤務歴半年ほどの自分がNICUの先頭で働くことになりました。必死に勉強しながら主治医として初めて担当した超低出生体重児は、言葉にできないほどんこく(北海道弁でかわいい)、退院のときにはその子と家族の幸せを心から祈らずにはいられませんでした。一方で、自分の対応の遅れによつて脳障害を残してしまつた早産児もいました。そうした経験に背中を押され新生児医療を専門に選びました。

子ども虐待に初めて気付く

卒後4年目に普段通り退院させ

の分野を勉強して専門機関で働くか、

全人的に健康を診る行政医師として働くかの3つについて、それぞれ関係する先生方に進路を相談しました。行政医師に関しては同門の古澤弥先生と寺田健作先生を通じて医療・保健衛生担当局長である西條政幸先生と面談させていただき、「何かをやりたいときには、気持ちだけではなく、アイデアとやり方が重要である」という言葉に感銘を受け、令和6年4月に札幌市に医師職として入職させていただきました。

新しい夢ができる

札幌市北区の保健福祉部で保健担当部長という職位を頂き、区民の健康を支える立場になりました。乳幼児健診を毎週行いながら、さまざまな困難を抱えた家庭に対する決定に責任を持ちます。また、生活改善や健康づくりに関わる人材を育てる仕事や性教育、虐待予防教育などにも関わります。「健康とは単に疾病や虚弱ではないということではなく、肉体的、精神的、社会的に完全に良い状態(ウェルビーイング)であること」という言葉の重みを再認識し、病院では手が届かなかった家族を救

う責任と可能性を感じています。

現在の日本では、1割以上の小学生に何らかの支援が必要で、令和5年の全国調査では1歳半までに単語が一つも話せない子どもが約13%(平成12年の同調査では約3%)と報告されています。少子化といわれる中で、子育て中の15世帯に1世帯がひとり親と子どもだけの家庭で、そのうち44%が相対的貧困²⁾といわれています。子どもを生んだ母親が、当たり前に心豊かに育児ができ、生まれた子どもたちが当たり前前に幸せに成長できる世の中をつくる³⁾ことが、今の自分の夢です。医師が主役ではない行政の現場で、多職種の仲間と肩を並べて働く日々は、大学水泳部で仲間と共に戦った日々を思い出させてくれます。尊敬できる上司や同僚に恵まれ、人として成長できる環境に感謝しながら、残り半分の医師人生で自分の経験と職能を生かして少しでも世の中を良くできるように精進したいと考えています。

■参考文献
1) 文部科学省 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について(令和4年)
2) こども家庭庁 令和5年乳幼児身体発育調査結果
3) 厚生労働省 2022(令和4)年 国民生活基礎調査結果